



No.012

# のとけんだより

春



金沢医科大学 総合医療学講座

2013.05.24

## — 医学の第1歩を 地域医療から学ぶ —

### 金沢医科大学医学部1年生が 早期臨床体験実習で奥能登の在宅医療・福祉介護を体験！

金沢医科大学 能登北部地域医療研究所（石川県寄附講座：所長 中橋毅教授）では、金沢医科大学医学部1年生7名を受け入れ、早期臨床体験実習の指導を行いました（期間：2013.5.14～15, 5.16～17）。

当研究所では、公立穴水総合病院の協力で、在宅診療の動向、診療所活動の見学、介護老人保健施設「あゆみの里」での福祉介護体験を内容としたプログラムを提供しており、医学生諸君に地域医療の現状を体験して頂きました（学生達は、少し実感できた様です）。総括・振り返りの時間では、医学生各自が熱く自分の思い思いを語り出し、帰学時間が過ぎても地域医療討論が続き、大変有意義な時間となりました。



MB3-0105 岩下真穂子さん

MB3-0428 澤田雄騎君

MB3-0246 川井田裕介君

能登ワインは、美味しい！

やぶこし商店で休憩

ある学生から、「穴水町の地域医療では、その人の人生を見据えた医療・介護福祉が提供されていることに気づきました」「地域や町民の方々は、病院や診療所だけが支えているのではなく、田舎のコンビニ（やぶこし商店）や村の自治会、公民館、婦人会や老人会等の協力が大きく影響しているんですね！」などの感想がありました。特に、兜診療所待合室の患者さんとの会話で、若い学生さんとお話できることが嬉しくて、患者さんの何人かが涙していたことが、とても印象的でした。

6年間の医学部生活が悔いのない有意義な時間となるよう心から願いつつ、常に患者さんやその家族の立場で診察できる優しい医師になってほしいと期待をする次第であります。

<補足と説明>

この早期臨床体験実習は、医学生が、社会における医療と福祉・介護の接点について、早期に実地体験をすることにより理解を深め、将来医師となるために必要な学習の動機付けを行うことを目的としています。個別目標としては、このプログラムをとおして以下のことができることを目当てとしています。

- (1) 入所者、患者さんとコミュニケーションをとることができる。
- (2) 食事介助を行うことができる。
- (3) 入浴介助を行うことができる。
- (4) 諸検査介助などのエスコートを行うことができる。
- (5) 体験をとおして、医療および福祉・介護について自ら意見を述べるができる。

## 早期臨床体験実習を振り返って

(G1: 2013.5.14～5.15)



MB3-0246 川井田 裕介

MB3-0428 澤田 雄騎

MB3-0105 岩下 真穂子

■MB3-0246 川井田裕介

5月14日、15日と早期臨床体験実習を穴水総合病院で行いました。

この2日間、病院内での診察や訪問診療に着いて行って見学させていただきました。1年生の間から実際に診察を行っているところを見させてもらったことはとてもありがたく、大変有益な時間となりました。

今回の実習で医師として必要なことは当然のこと、地域医療の現状など本当に様々なことを学びました。

島中院長がお話してくださった「医師は病気だけでなく、その患者さんの人生すべてを見なくてはいけない」ということは特に印象に残っています。そしてこのことは都会や田舎関係なく医師に必要なではないかと思えます。

兜診療所という小さな診療所も訪問させていただきました。そこの待合室ではその地域のお年寄りの方々と楽しくお話しさせていただきました。

また、昼食時や訪問診療からの帰りの車中では中橋先生から地域医療の問題点などをお話ししていただき改めて複雑な問題だと認識し直しました。

そして「田舎のコンビニ」と称される「やぶこし商店」にもうかがいました。事前に視聴したDVDと同じように地元の方が何人かいらっしゃいました。そこのお店の方はサービスで車のないお年寄りの送迎をしていると聞きとても頭が下がる思いがしました。

今回の2日間の実習で地域医療について考えることができました。また、今後の学習のモチベーションを高める良いきっかけになりました。

最後に2日間に渡って様々なお世話をしてくれた先生方や診察を見学することを快く受け入れてくれた患者さんに感謝したいです。ありがとうございました。

●MB3-0428 澤田雄騎感想

私が今回の実習で学んだ事は、過疎地区での医者との係わり合いや診療所の地域での役割、訪問診療をする時の患者さんとの接し方について学びました。私は特にこれから診療所が地域の人々の健康を守るために何をしなければいけないのか、について深く考えさせられました。過疎地域では病院に行く為の交通手段が少なく、バス等も1時間に1回すらない状況になっています。高齢化が進んでいるこういった地域の人々は慢性的な病気になってしまっている方が多くどうしても病院に行かなければなりません。私たちが訪れた地域で

はやぶこし商店さんが病院に通うのが困難な方の手助けをしていました。

しかし、どこの僻地医療の現場にもそういった方がいるとは限りません。また、将来やぶこし商店さんがなくなってしまった時に、私たちは将来医者になる者として行政や地域の方々と協力して病院に通えるような仕組みを考えていかなければならないと思いました。

■MB3-0105 岩下真穂子

今回の早期臨床体験実習を通して、過疎地域・僻地における医療について初めて真剣に考えました。公立穴水総合病院や甲診療所がある地域は、数十年後の日本の姿と言われるほど、高齢化が進んでいます。一人暮らしである、寝たきりである、また、交通の便が悪く通院にも一苦労、高齢での農作業で体の節々は痛む、などそれぞれの患者さんが抱える問題は挙げればきりがありません。

そのような状況で、医療機関が果たすべき役割は、病気を治す、ということ以上に大切なものがあると強く感じました。なぜなら、私が今回、甲診療所で出会った患者さんは体の不調はあるものの、自分の力で歩ける方、元気に仕事をされている方ばかりであり、老いによる病気と上手く付き合おうとしているように思えたからです。医師の先生方・看護師の方・その他のスタッフの方は、地域に溶け込み、そんな患者さんに耳を傾け、同じ目線で病気と向き合われていました。一緒に歩いていくのだ、という心意気に溢れていて、それが患者さんにも届いているようで、率直に、とても温かい気持ちになりました。待合室ではみんなが顔見知りで、お互いを気遣ったり、近況報告をしたり、季節の話をしたりと、社交の場にもなっています。診療所は、住民同士の交流場所でもあるのです。そして、最も印象に残った、近くのやぶこし商店は、ご近所さん同士の、安否確認も兼ねるような、その上、行政が行うようなサービスを善意で行っており、地域にとって必要不可欠で、支え合い、という言葉がすぐに浮かぶ場所でした。将来、地域医療に携わりたいと考えていますが、実地を見学してみて、想像以上に厳しい現場で、考えが甘かった、と感じました。それと同時に、自分もその現場に身を置き、先輩の医師のように、地域を盛り上げ、守れる存在になりたいと改めて思いました。

(G2: 2013.5.16~5.17)



MB3-0612 露口直樹君

MB3-0911 堀川 悠さん

MB3-0569 田中めぐみさん

MB3-0698 西垣綾子さん



■MB3-0612 露口直樹

大学生になって初めての実習でした。私たちのグループは公立穴水総合病院に行き、高齢者に対する医療について様々なことを学びました。

一日目は病院で実際に先生たちが行っている診療を間近で見せていただきました。先生たちは患者さんに対してとても優しい口調で話しかけていました。全ての患者さんが安心して帰って行くのをみて、そのことがどれだけ重要なのかを実感しました。二日目は穴水町甲地区に行き、在宅診療の見学をさせていただきました。歌を歌ってくれるおばあちゃんがいたのですが、先生はおばあちゃんがどこまで苦しげに歌うかで、そのおばあちゃんの体調をみたりしていたのがとても印象深い出来事でした。

この実習でどれだけ自分が疲れていても、患者さんに疲れをみせず、そして冷静に患者さんを診ることが重要だとわかりました。将来、私もそういう医師にならないといけない、この実習を通じて思いました。

■MB3-0911 堀川 悠

今回、早期臨床体験実習では穴水総合病院では、特に地域医療と高齢者の医療について、多くの事に触れた。一日目は、穴水の地域の現状を知り、また病院内見学で実際にどのように医療が行われているかを見ました。診察や入院では、ほとんどの方が高齢者で、中橋先生は患者を診察しているなかで、普段とおかしい点はないのかを会話の中で留意していました。そして、特にそれを見つけて出す為どのようにしているのか？を睡眠、食事、仕事や普通の生活の話と患者としながら探っている事、またその地域の方言などにもなれなければならないという事を教えてもらいました。自分が地域医療について、ただ漠然としか考えて無かった事を思い知らされましたが逆に、今回の実習で触れて学ぶことができ、非常に貴重な体験ができました。

二日目では、甲診療所や訪問診療の見学、DVD で見たやぶこしの商店に行きました。そこでも実際に見学させてもらい患者さんと話す機会がありましたが、この時になかなか上手に話すことができず、またコミュニケーションを率先してできなかった事が難しく、またとれない自分が、かなりもどかしく感じた事が心残りでした。最後に簡単にしか書けなかったのですが、自分の実家は人口1万人弱の町で、今回体験した穴水の地域と似たような環境で将来、医師となり、医療従事者の1人として携わる。穴水の地域の高齢化率は約40%で日本の約2050年の姿の中で医療に携わっていると言われていたが、約10年後、自分が医師になった時は、更に状況がめまぐるしく変化し、もしかしたら、村や町自体がなくなっているかもしれない。この体験を活かし、大学生

活の6年間、まだ卵の卵だか学んでいこうと思う。そして穴水の先生方が言っていた、本当に良い医師は患者の事を考えられる優しい医師でそういう医師になれるように努めたい。

■MB3-0569 田中めぐみ

人口1万人足らずのいわゆる過疎地域でどのような医療が行われているのか、2日間という短い間ではありましたが学ばせていただきました。

院内や診療所で見学させて頂いたり訪問診療にご一緒させて頂いて思ったことは、患者さんに対する接し方についてです。ご高齢の方が多く方言もあるので、そういうことを考慮して先生方はわかりやすくはっきりとおっしゃっていました。また、常に笑顔を絶やさず、患者さんがどんなにゆっくり話していてもいららしない姿を見て、自分も将来はこんな医師になりたいと強く感じました。

人と人との繋がりを大切に、常に相手を思いやる気持ちを持ち、「良医」を目指して日々精進していきたいです。今回は貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございました。

■MB3-0698 西垣綾子

二日間という短い期間でしたが、地域医療の取り組みが盛んな穴水地区で、貴重な医療現場を見学させていただきました。この度私たちが訪れた穴水地区は、65歳以上の高齢者が人口全体の40%を占めています。日本の高齢化が今のまま進めば、2050年には穴水のような割合になっていると同いました。超高齢社会となった日本全体において今後どのような点に気を付けて医療がなされていくべきなのか、見学させていただく中で見えてきた事がありました。

それは、個人の尊厳を重視した医療です。穴水地区において、終末期に人工呼吸器をつけるいわゆる延命治療というものがほとんど選択されていないことが印象に残りました。病院に入院するよりも自宅で療養することを選び、その意思を尊重し訪問診療に訪れる先生の姿や、やぶこし商店をはじめとする、地域全体で高齢者を支えようとする取り組みに、急性期の医療では忘れがちな、個人の意思の尊重とひととひととの繋がりの温かさを感じました。

この早期臨床体験実習を通じて、どのように患者さんと接するべきなのか、自分がどのような医師となるべきか、改めて見つめなおすことが出来たように思います。お忙しい中、御指導いただき本当に有難うございました。今回の実習での経験を糧に、今後六年間、精進していきたいと思ひます。

※関係者する皆さんには掲載の了承を得ております。



〇問い合わせ(濱中・橋本・濱崎)  
能登北部地域医療研究所(公立穴水総合病院内)  
電話 0768-52-0655 FAX0768-52-0658  
E-mail ccm@kanazawa-med.ac.jp  
〒927-0027 石川県鳳珠郡穴水町川島タ-8